

「今日の説教、聴き手のために」

(講壇-10) 2015/1/4 明治学院教会 岩井健作 (前牧師)

『命の道を歩め、警鐘に耳を澄ませよ』 エレミヤ書6章13節-17節

- 1、2015年。新しい年を迎え、今年はいっそう「預言者たち」に学び、彼らの後を追う年だ、という思いを深くしている。特に、紀元前7世紀、不真実な世の中であって、神の真実を語って苦悩しつつ、神の裁きと救いを語ったエレミヤの生涯が思い出される。今日はエレミヤ書の6章から、三つの事を学びたいと思う。
- 2、まず第一、時代状況の認識。「身分の低い者から高い者に至るまで、皆、利をむさぼり、預言者から祭司に至るまで皆、欺く。彼らは、わが民の破滅を手軽に治療して、平和がないのに『平和、平和』という」(13-14)。日本の現状との重なりを覚える。「争点はアベノミックス」「集団的自衛権行使」「原発再稼働」というカネと武力の論理で選挙をやり、勝利した。はやばや「武器輸出に国が資金援助」(12/17, 1/1, 東京)が検討されている。やりたい放題である。投票率は戦後最低の52%、「議會制民主主義が『自壊状態』に陥る兆しとして受け止めている。」(岩崎正洋・日大教授 12/15 東京)「日本国は倒産しましたのであとは勝手に・・・とはいきません。[grow or die]ではなく [how to live]を問うべきときではないか」と『カネ優先』見直すとき(内田樹 12/18 東京)と訴えられている。格差、差別、軍事化、言論自主規制・統制へと一段と社会が傾いてゆく年を覚悟しなければならない。厳しい冬の時代である。
- 3、第二、「如何に生きるか」の思考。「さまざまな道に立って、眺めよ、昔からの道に問いかけよ」(16)。イスラエル民族はアッシリヤ(後バビロニヤ)、エジプトの列強に挟まれ様々な価値観や宗教の影響を受けてきた。地中海沿岸民族ペリシテからの「バアル神(経済を至上価値とする)」が、権力と結びついてからは、ヤハウエ(主)信仰との熾烈な戦いが繰り広げられた(「エリヤの戦い」は顕著。列王上18章)。エレミヤの時代それは「ヨシヤ王の宗教改革(申命記12-28の発見による) B.C. 621-622」(列王下22章)として起こった。彼の生涯で出会った大きな政治事件である。エレミヤはヨシヤ王の援護をした。「金か命か」。古くはエーリッヒ・フロム『生きるということ』(TO HAVE OR TO BE 1976, 佐野哲郎訳 1977 紀伊国屋)や暁岡淑子『豊かさとは何か』(1989 岩波新書 85)、「豊かさとは人間と人間の関わり」を示唆が語っている。ヤハウエ信仰は「昔からの道」「命の道」である。
- 4、第三、「命を守る生き方の避難所を作り出す」。「その道を歩み、魂の安らぎを得よ」(16)「耳を澄ませて角笛の響きを待て」(17)とある。「命の道」を歩んで人生半ばで逝った小田原紀雄(69)さんの事を、この言葉と重ねて思う。彼は「牧師」で山谷労働福祉センターの設立者(朝日)であった。「革命家」といわれる程に「反天皇制」との闘いを続けた。彼の予備校講師(河合塾・古文)は生活のためだとばかり思っていた。追悼集会で生徒たちの追想を聞き、どんなに彼が優しく暖かい人であったかを知った。現代の「人間の避難所」を思わせた。教会も「魂の避難所」の一面を担いたい。